

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 法学部 第二類(公法コース) 3年
 参加プログラム: 8th APRU Undergraduate Summer Program 派遣先大学: University of Malaya
 卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) **3.公務員** 4.非営利団体
 5.民間企業(業界:) 6.起業 7.その他()

派遣先大学の概要

マレーシアの首都クアラルンプールに位置し、マレーシア随一の大学として知られる。同国歴代首相の多くも同大学の卒業生である。学部生・大学院生を合わせて約 25,000 名。環太平洋大学(APRU)加盟校。

参加した動機

世界を「土地」と「人」の2つの面から肌で感じてみたかったということが参加動機である。多層的な歴史を有し、堅固な経済成長を続けるマレーシアの風土とパワーに触れること。異なったバックグラウンドや価値観、独自の経験や識見を有するアジア各国の学生リーダーと交流し議論を深めること。この2つを通じて多くのことを身をもって学び、世界の中の日本人としての知見を磨く、今後の研鑽の方針を立てたいと考えた。

参加の準備

①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

航空券の準備を始め、保健への加入や各種書類の提出等早め早めの準備を心掛けた。問い合わせメールに対する受入先の返信が来ないことがしばしばあったが、その場合には複数回にわたり同内容のメールを送るようにした。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)
特になし。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

プログラムのオプションツアーとしてジャングルに行く機会があったが、インターネット等で事前に調べたところ短期間の滞在であれば予防注射等は不要とのことであったため特に何もしなかった。プログラム期間中の訪問場所について事前に調べておくのが得策であると思う。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

本部国際交流課に指定していただいた「公益財団法人日本国際教育支援協会」の「学研災付帯 海外留学保険」に加入した。その他、クレジットカードにも海外旅行用の保険が付いていた。

⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

夏季休暇中の超短期留学であったこともあり、履修や単位に関する手続きは特になかった。現地での宿泊先や、航空便の時間、受入先との連絡状況等は分かり次第速やかに報告するように心掛けた。

⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

TOEFL や IELTS 等では一定以上のレベルがあったが、日常的な英語学習は週1回の英会話講座と、毎日30分程度の英単語・会話表現の学習のみだった。英会話の実践練習をもっと行っておくべきであったと反省している。

⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

空調(講義室、バス等)の温度が異常に低いことがしばしばあったため、カーディガンなど羽織るものを用意しておくとい。また、プログラム内容にプレゼンが含まれる場合はノートパソコンを持ち込むと便利である。

学習・研究について

①プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

授業 10 回(各回 90~150 分程度)+プレゼン(グループ対抗での Proposal Competition)+Cultural Class5 回(伝統舞踊の練習、各回 120 分程度)という構成。授業の最後 30 分程度は質疑応答の時間が設けられており、各参加者が競うように質問や意見を講演者にぶつけていたのが印象的だった。プレゼンは、授業を通じて学んだリーダーシップの実践を組み入れたプロジェクトを提案するという内容で、インプットとアウトプットの機会が両方用意されているのはとても良かったように思う。ただ、プレゼンの準備時間が限られていたためにグループ内での議論を尽くすことができなかったのはやや残念であった。

②学習・研究面でのアドバイス

学習内容はごく基本的な内容から始まり、また具体例を多く交えてのものであったため特に予習等なくとも理解できるものであった。周囲の参加者と議論したり、スピーカーに質問したりすることで理解が深まると思う。政治、宗教、経済等各界のリーダー達から直接お話を伺うことができたのは貴重な体験だった。

③語学面での苦勞・アドバイス等

スピーキングの練習が不足していたために、言いたいことを表現できず歯がゆい思いをすることも多々あった。内容を深める上で、言われた内容を理解し、自分の意見を表現する語学力は大前提となる。特に後者については、会話を通じて意見を表現する練習を積んでおくとよい。



生活について

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

マラヤ大学の International Student Centre に宿泊した。清潔で家具も充実しており、非常に快適だった。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

気候は気温・湿度ともに高いが、日本と比較すれば低い。大学周辺には比較的大きなショッピングモールがあり、タクシーやバス等も容易に使用できる環境にあった。食事は辛すぎるものと甘すぎるものが含まれることが多く、慣れるまでやや苦労したが、多民族国家ということもあり様々な食事を楽しむことができたように思う。お金は複数の財布に分けて管理(大きいバッグ・小さいバッグ・宿舎)するようになった。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安はそれほど悪くないと感じたが、特に繁華街や電車内では貴重品の管理に注意するようになった。ハードな日程であったため、疲労時には夜の観光をパスして部屋で休むように心掛けた。

④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空賃 7 万円、授業料 450USD、オプションツアー代 350USD、食事は 1 回 10~20RM 程度(300~600 円程度)。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

東京大学からの奨学金 7 万円。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

授業がない時には他参加者と観光に出かけるなど、交流を深めることを意識して活動した。

派遣先大学の環境について

①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

各部屋のバディ(マラヤ大生)に何でも相談できる環境にあり、充実したサポートを受けられる環境にあった。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

Wi-Fi がどこでも使えるようになっており、非常に便利であった。

プログラムを振り返って

①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

Undergraduate Summer Programに参加する意義は何か。それは「自分の『位置』を把握すること」であるといえる。すなわち、各国の同世代リーダーたちと共に時間を過ごすことを通じて、彼らの高いバイタリティー、あるいは卓越した知性を肌で感じ、自らに足りないものを知ることである。国内では、試験での好成績や「就活偏差値」の高い企業に就職すること等、いわば「日本基準の成功体験」(もちろんそれも大切なのであるが)のみによって満足してしまいがちな傾向があると考えられる。一方で海外の学生と机を囲み、時には協力し時には競い合いながら共に課題を乗り越える過程では、試験での点数や肩書は何の意味も持たず、チームの中でどのようなバリューを出すことができるのかということが重要となる。知識や経験に裏打ちされた高度な思考力・分析力、限られた時間内で最大のパフォーマンスを発揮する力、観衆を魅了するプレゼン力。仮に言語の壁がなかったとして、彼らと渡り合える実力が自分にあっただろうか。そういう問いに向き合わざるを得ない環境に身を置くことによって、自らの強みと弱みを知り、今後の課題を認識することが可能となるのではないかと思う。

参加を通じての一番の成長は、まさに「世界のトップレベルと自分との乖離をはっきりと認識したこと」ということに集約される。このプログラムに参加していなければ、自分のレベルへの満足感を味わいながら、試験や就活といった至近の目標のみ見据えた近視眼的な「努力」を続けていたと思われる。将来的には世界最高水準のリーダーたちと渡り合う実力を付けることを目標に、長期スパンでの研鑽を積む決意をするに至ったことは大きな収穫である。これまで「人」に焦点を当ててプログラムの意義を述べてきたが、Cultural Classでの伝統舞踊のレクチャーや、各所での食事等、マレーシアという国の魅力を感じる分味わうことができたのも貴重な体験であった。

②参加後の予定

今回のプログラムで交流を深めた卓越した学生たちとの距離を埋める努力に励もうと思う。語学力の向上はもちろん、幅広い分野にわたる知識と高度な専門性を身につけることを心がけたい。学問的識見を深める時間を確保するため、これまであまり考えていなかった大学院進学も視野に入れてキャリアを選択していくつもりである。

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

「まずは国内で実力を付けてから」と考えるのではなく、目の前のチャンスを掴み、未知の環境に飛び込んでみる勇気も大切だと思います。私自身、大学1・2年次は座学メインの生活を送っていたのですが、今回プログラムに参加して、「躊躇無く挑戦すること」の意義を痛感しました。なるべく早い時期に、世界のトップレベルに触れる経験をすることを心からお薦めします。

その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

・APRU Undergraduate Summer Program 2015

<<http://apru.org/creating-global-leaders/undergraduate-summer-program/item/612-undergraduate-summer-program-2015>>

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。



東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 教養学部一年

参加プログラム: APRU USP 2015 派遣先大学: マラヤ大学

卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) ③.公務員 4.非営利団体
5.民間企業(業界:) 6.起業 7.その他()

<p>派遣先大学の概要 マレーシアの首都クアラルンプールに位置し、同国で一番古い歴史を持つ大学。</p>
<p>参加した動機 AEARU2014 に参加した経験から、似たような短期学生交流をしたいと思ったため。</p>
<p>参加の準備</p> <p>①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど) 特に英語で意見を言えれば問題はない。</p> <p>②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど) 無し。</p> <p>③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等) 無し。</p> <p>④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等) 大学の指示による。</p> <p>⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して) 無し。</p> <p>⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等) 無し。</p> <p>⑦日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど アジア圏なら、お土産にはハラール認証を得た抹茶系のお菓子が良い。</p>
<p>学習・研究について</p> <p>① プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等) レクチャーを受け、各自で発表やグループでのディスカッション、プレゼンなど。</p> <p>② 学習・研究面でのアドバイス 基本的な世界史の知識と日本の政治体制を話せる英語力を。</p> <p>③ 語学面での苦勞・アドバイス等 特になし。</p>
<p>生活について</p> <p>① 宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など) 大学が用意してくれたインターナショナルハウス。</p> <p>② 生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など) 日本よりも気候は湿度・温度ともに快適。</p> <p>③ 危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など) なにかあれば OSSMA に。</p> <p>④ 要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算) 80米ドル(11万円)参加費と航空券6万円と保険料などを含め20万強。</p> <p>⑤ 奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など) 大学より7万円</p> <p>⑥ 学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など) 現地学生が外に連れて行ってくれた。</p>

派遣先大学の環境について

- ① 参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)
特にないが誰にでも相談はできよう。
- ② 大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)
大学内はあまり使用していない。

プログラムを振り返って

- ① プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感
他大学は豊富な資金援助を得て有意義に過ごしていた。海外だけでなく、日本の国立大でも同じ条件なのに支給額は全くことなり、同じ国立大として圧倒的に優秀な学生への福利厚生を充実させないことはやがて大きな影響が出るだろう。そこは大きく改善してほしい。なんならもっと審査を厳しくしてもいいので。優秀な学生が流れていく。とくに物価も高い日本で留学したいとおもう優秀な学生はそんなにいないことに驚いた。シンガポール国立や米国に(奨学金を得て)流れていってしまう。
- ② 参加後の予定
未定。
- ③ 今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス
世界史、日本史、社会問題については教養として英語で話せると良いです。

その他

- ① 準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物
- ② その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。

8th APRU UNDERGRADUATE SUMMER PROGRAM 2015
Developing Future Global Leaders of the Pacific Rim: The Different facets of
Leadership
2-12 August 2015, University of Malaya
Kuala Lumpur, Malaysia

1. 内容

マレーシア首都クアラルンプール特別区内マラヤ大学にて講義をうけるため、環太平洋地域の大学生が集まった。ディスカッションや大学別地域紹介、その他観光や交流などのさまざまなアクティビティを通じて、互いの考えを紹介しあい良い友人を作ることが目的とされた。最終日に10の班に分かれそれぞれの政策やビジネスプランの提言を行い、賞金をかけたコンテストが行われた。

2. 費用

参加費用は、レクチャー後の希望者によるタマン・ネガラ国立自然公園ツアーを含め800米ドル。ただし、国際送金の手数料が不明の為820米ドル程度の送金（国際レート換算およそ11万円）。のちにツアー代金過剰徴収が認められ、150米ドル返還で合意。その他航空券が往復でおよそ6万円。食費や個人的な出費が数万。

大学からの支給額7万円を8月末に受領。ご支援に感謝いたします。

3. 感想

世界各国の学生と交流する貴重な機会に会話ができる程度の英語力が必須。とくに世界史や異文化の知識と自国の政治体制を話せることが、深い交友関係に発展させるためには必要と痛感。講義は極めて自由度が高く、自分の意見や発表が重要視されるので、気楽に面白みのある発表やプレゼンを考えることが大事。

共同生活への支障はなかったが、慣れない東南アジアの料理や天候など環境への対策は必要だった。途中、保険会社指定の市内の病院救急外来にかかることがあった。費用は何とかなったが、すべて英語またはマレー語でのやり取りであり、医療の仕組みも国ごとに実に異なるので、事前の準備が役立った。

東北大学などの参加者もいたが、同じ国立大学ではあるがむこうは必要費用全額支給であり、差をかんじた。海外の大学生の相当数もそれなりの補償をもらっているのに東京大学は支給していない時点で改善を強く要求する。(特に授業料免除学生など経済的な余裕のない者に機会を減らさせてはいけない、との声が他国でさえもあった。アジアで確固たる地位を持つ東大ならば当然である。)

総じて、マラヤ大の学生の方々が大変よく接してくれた。自主的に運営して学生目線の素晴らしい企画や観光プランを練ったその努力とやさしさと思いやりには脱帽。